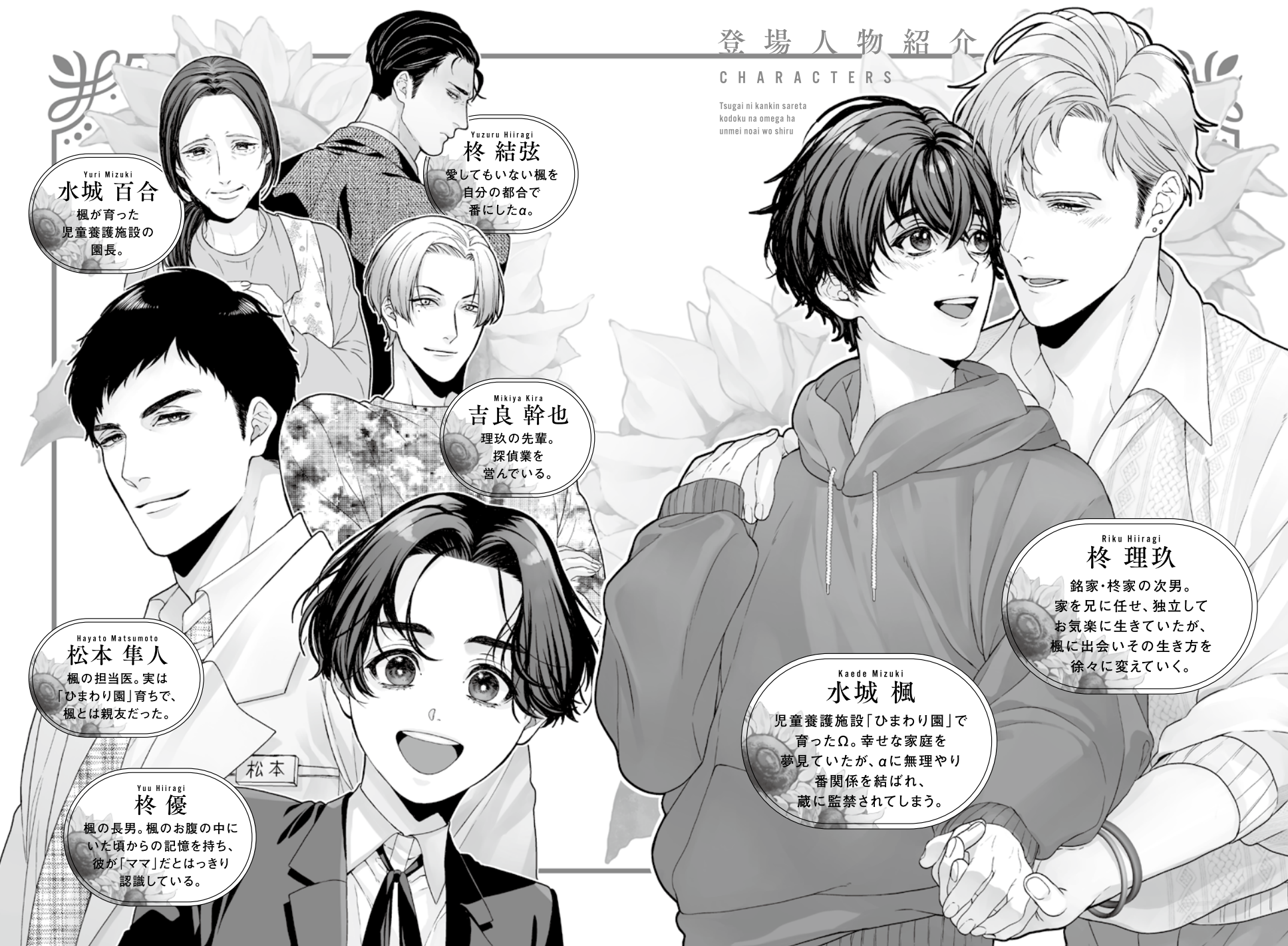
番(つがい)に監禁された孤独なΩ(オメガ)は運命の愛を知る

# 登場人物紹介

CHARACTERS

Tsugai ni kankin sareta
kodoku na omega ha
unmei noai wo shiru




Yuri Mizuki
**水城 百合**
楓が育った
児童養護施設の
園長。

Yuzuru Hiiragi
**柊 結弦**
愛してもいない楓を
自分の都合で
番にしたα。

Mikiya Kira
**吉良 幹也**
理玖の先輩。
探偵業を
営んでいる。

Hayato Matsumoto
**松本 隼人**
楓の担当医。実は
「ひまわり園」育ちで、
楓とは親友だった。

Yuu Hiiragi
**柊 優**
楓の長男。楓のお腹の中に
いた頃からの記憶を持ち、
彼が「ママ」だとはっきり
認識している。

Riku Hiiragi
**柊 理玖**
銘家・柊家の次男。
家を兄に任せ、独立して
お気楽に生きていたが、
楓に出会いその生き方を
徐々に変えていく。

Kaede Mizuki
**水城 楓**
児童養護施設「ひまわり園」で
育ったΩ。幸せな家庭を
夢見ていたが、αに無理やり
番関係を結ばれ、
蔵に監禁されてしまう。

# 目次

番に監禁された孤独なΩは運命の愛を知る　7
番外編　二人だけの時間　325

番に監禁された孤独なΩは運命の愛を知る

# 一、

「楓、あなたと結婚したいという人がいます」

「え？　結婚？」

まだ十八歳の俺にとっては信じられない言葉だった。

「Ωのあなたは大学に行くことも働くことも難しいでしょう？　これから先のことを考えても結婚するのがベストだと思うわ。それにね、あなたを妻にできるなら、この施設に多額に寄付金をくださると言ってくださっているのよ」

ここ、ひまわり園は身寄りのない子供たちが暮らす児童養護施設だ。

俺、水城楓は生まれてすぐにここに捨てられ、十八年間この施設で過ごしてきた。

この施設にいられるのは十八歳の高校三年生まで。その先は働くか寮のある大学に入るかしなければいけないが、俺はΩという第二次性が邪魔をして就職先にも大学にも受け入れてもらえず今後の居場所がない状態だった。

だから、ありがたい話なんだろうけど、知らない人と結婚するのか……

正直、自分の性別がΩだと分かってからは良いことなんてなかった。



Ωという性別は周囲に迷惑をかける存在である。

そんな考えが根付いている世の中で、俺が自分の好きなように生きるのは難しい。施設でも何か間違いが起きないように、Ωは他の人と違う建物に住まなければならない。この施設ではΩは俺だけだから、以前までたくさんの子たちと同じ部屋で寝ていたのに、ある日、突然たった一人で夜を過ごさなければならなくなった。

本当は大学だって行きたかった。でも、寮に入るのが難しい。寮という閉鎖的空間でΩが発情した場合を考えると、Ωの入寮を許可するのはリスクが高すぎるんだ。

だから、今回の結婚は俺にとっては一番良い進路なのかもしれない。

相手は有名な柊という家系の本家の長男みたいで、歳は三十一と俺より十三も上。柊家は古くから日本の経済を支えてきた由緒正しい一族で、現在では金融から製造業、小売業と幅広い事業を展開している大企業グループでもある。俺なんかが嫁げるような相手ではないことはすぐに分かった。

どうして俺を？　と思った。

相手が言うには、この施設は柊の家が経営に関わっていて、その繋がりで俺の存在を知ったそうだ。

柊結弦さん、俺が人生で初めて出会うαだ。

この施設にはαはいない。学校にもβしかいない。そんなβしか知らない生活を送っていたから、αなんて存在しないんじゃないかとも思っていたくらいだ。

自分の性別がΩだと分かった時、知識をつけたくてネットでたくさん調べた。その中でαという存在に強い憧れを抱いた。αとの発情期はすごく愛されるのかなとか、巣作りってやつを俺もするようになるのかなとか、番になるってどんな感覚なんだろうとか。Ωという性別に不安を抱きながらもまだ見えぬαという存在に明るい未来を期待していた。

結局、今回の話を断る理由なんて見つからなかった。

もちろん、不安はたくさんあった。

立派な家に俺なんかが嫁いで大丈夫なのかとか、釣り合わないだろうなとか。

でも、施設に寄付金が入れば俺にとって家族みたいな施設の子供たちがお腹いっぱいご飯が食べられる。好きなものを買ってもらえる。誕生日にケーキが食べられるかもしれない。

それに、特別いいところなんてない俺をそんなふうに言ってくれる人なら、きっと幸せにしてくれると思うんだ。

いつかは子供も欲しいな。

本物の家族には人一倍憧れがあるから、自分の家族を作れるΩという性が特別に感じられた。

Ωになりたくない人はたくさんいると思う。俺だって元々はそうだった。でも、俺は自分の子供を妊娠できるΩという性に誇りを持てるような気がしていた。

「園長先生、俺、柊さんのところいきます」

「本当？　嫌なら断っても良いのよ？」

「いえ、俺は園長先生もご存知の通り就職も進学も難しいので、貰ってくれる人がいるならありがたく思いますし」

「楓、ごめんなさいね。私自身βでΩのあなたに何もできなかったわね」

「園長先生は良くしてくださいました。俺、きっと幸せになります」

そうして俺は柊家に嫁ぐことになった。

十八年お世話になったひまわり園に別れを告げ、足を踏み入れたことのない新しい土地に腰を据えることになったのだ。

この日の俺は希望に満ち溢れ、施設のみんなと別れを惜しんで柊さんの家に向かう車に乗り込んだ。

俺の人生はこの車に乗ったことで終了してしまった。死んだわけではないが、死んだも同然に。

――この日から十一年。

幸せなんて感じられないまま自分自身の命の終わりを感じ始めていた。

窓の外から聞こえる子供たちの声。

俺が産んだ子たちだ。多分、十歳の息子と四歳の娘と一歳の息子。

でも、腕に抱いたことも触れたことも、会ったことすらない。

俺はいつまでもこの蔵で一人だ。

この屋敷に初めて来た日から俺はこの蔵しか知らない。

蔵に案内されて戸惑った。

え？　結婚するのにここに住むの？　と。
「君と結婚する話は君をここに連れてくるための嘘だ。君には俺の子供を産んでもらう。これはヒートの誘発剤だ。夜になったら来るからそれまでに飲め、その前に風呂と洗浄を済ませておけ」
顔合わせの時はあんなに優しかった人が急に冷たくなった。柊さんに言われたことを理解するのに時間がかかった。
結婚は嘘？　ならどうして俺はここにいるんだ？
「え、ど、どういうことですか？」
俺が質問すると、嫌そうに柊さんは説明をしてくれた。
彼には奥さんがいること。その奥さんが不妊のため治療をしようとしたが、彼女にはもともと卵子がなく、妊娠が不可能であると告げられたこと。
奥さんは子供が欲しくてたまらないそうで、他人に子供を産ませることにしたそうだ。
しかし、女性が産むのは奥さんが嫌がり男のΩに産ませることにした。そこで選ばれたのが身内もおらず、施設育ちの俺だった。園から出れば俺のその後を探る者などいない。この家に閉じ込め子供を産ませるには丁度良い存在。
目の前が真っ暗になった。
幸せな日々が待っていると思ったのに、そんなことはなかった。
俺は、ただ子供を産むための道具としてここに連れてこられたんだ。
その日の夜、俺は初めてのＳＥＸをした。



初めては痛いけど幸せな気持ちになるって、そう聞いていたから少し期待していた。でも、ただ虚しいだけだった。柊さんは義務のように勃たせて挿れて中に出して、俺のうなじを噛んだ。
番契約をしたら俺が逃げ出せないから、と。
三ヶ月後、俺の妊娠が分かった。
それから柊さんはここに来なくなった。
俺は日に日に大きくなるお腹が怖くて仕方なかった。
ここに来て以降、柊さんとお医者さんにしか会っていない。食事は一日三回、蔵の入り口に届けられていて誰かと会うことはない。孤独な妊婦生活が始まった。
つわりがひどくて食事が摂れなくなった。みかんが食べたかったが、それを伝える術を知らず、子供のためにと無理やりご飯を食べては吐いていた。
愛されていないと頭では分かっていても番である柊さんを求めてしまう自分を抑えられない。
柊さんに近くにいてほしい。抱きしめてほしい、手を握ってほしい、支えてほしい。そんな叶いもしないことを願っては絶望する日々。
お医者さんも一ヶ月に一回しか来ないし、他に人に会うこともない。まだ十八歳の俺にはおかしくなりそうな日々だった。
胎動が感じるようになってからは、お腹の中の子供が動くのが気持ち悪いと思った。怖くて仕方なかった。
俺には子供の状態も性別も伝えられず、エコー写真すら見たことがない。

お医者さんは検診が終わると、「今日はこれで終わりです。柊様にはご報告しときます」と、それだけを言って帰る。
虚しかった。俺という人間がまるでこの世に存在していないような感覚だ。
それでもどんどんお腹は大きくなる。十ヶ月もお腹の中で子供を育てていると、臨月に入った頃には愛しくて仕方なくなっていた。
俺は一人じゃない気がしたから。この子がいるんだってそう思えたから。
男の子か女の子かも分からないけど、それでも早く君の顔が見てみたいよって、そう思った。
俺に似てるのかな？　とか、どんな子になるのかな？　とか、いっぱい考えた。

「――もういつ陣痛が来てもおかしくありません。陣痛が来たらこれを押してください。私にすぐに通知が届くようにしています」
予定日が一週間後に迫った頃、そう告げられた。
赤ちゃん、生まれるのか。
陣痛痛いのかな、鼻からスイカ出すくらい痛いって聞くしな。
柊さん、出産の時くらいは来てくれるかな。怖いよ。
――ガラガラ。
その時、蔵の扉が開く音がした。
柊さん？

蔵に入ってきたのは綺麗な女の人だった。
「あ、の、あなたは？」
「柊静香と言います。柊の妻です」
柊さんの奥さん。
「え、っと、あの、俺っ――」
「口を開けないで。あなたみたいな教育もなってない人を利用するしかないだなんてっっ。子供を産んでくれることには感謝しますが、それだけです。ここで食事にありつけることありがたく思いなさいっ」
彼女はただそれだけ言って去っていった。
なんでそんなこと言われるんだろう。
俺はここに来たくて来たわけじゃない。結婚するって言われて、寄付金のためにって施設の人にも言われて、そしたらただ子供を産めって言われただけなのに。
逃げ出したかった。
でも、柊さんと番となってしまった今、逃げたら自分がどうなるのか分からない。
番を解除してくれればまた誰かと番になれるけど、解除してくれなかったら番欠乏で弱って死んでしまう。
逃げ出せない。
「っ、いた、いたぃ」

お腹が急に痛くなった。
痛い、痛いよ、何これ、痛いっ。
これまで感じたことのないような強い痛みに襲われる。お医者さんに連絡したけど、痛くてたまらない。なのに柊さんは来てくれなくて――
「いたぃ!! いたぃぃ、むりぃ、ひ、らぎさっ、ひいらぎさんっ」
何時間も何時間も気が遠くなるほど長い時間痛みと戦い続けて、何度も柊さんの名前を呼んで、いない相手を求め続けた。

「んぎゃぁぁぁ、おぎゃぁぁ」
「う、生まれた？」
赤ちゃん、生まれた。
俺の、初めての家族だ。
「あか、ちゃん、あかちゃん」
声の聞こえるほうへ手を伸ばしたが、その手が赤ちゃんに触れることはなかった。
子供を取り上げたお医者さんがさっさと横にいる看護師さんに渡してしまう。あっという間に部屋から赤ちゃんの声は聞こえなくなった。
俺は訳も分からないまま気を失って、目が覚めた時には部屋に誰もいなかった。
また誰とも会わない生活が再開する。



俺、赤ちゃんの顔も見ていないし、性別も分からないままだ。
「お腹、ぺったんこ、っ、抱っこも、してない」
あんなに大きかったのに薄くなってしまったお腹を見ると、虚しくてたまらなかった。
俺はまた一人になった。

□ ■ □

俺が初めて子供を産んでから十年が経ったらしい。
らしいというのは、日付けを知る術のない俺には今日が何日なのかが分からないからだ。でも、季節が何回変わったかとか、メイドさんの口にする言葉とかで、ある程度の日にちを把握していた。
妊娠と出産を繰り返し、最初の子を含めて合計三人の子供を産んだ。
一人目は男の子で名前は多分〝ゆう〟。
この蔵からは屋敷の庭の音が聞こえる。あの子が庭で遊んでいる時にゆう様と使用人に呼ばれていたことで名前と男の子だということを知った。
真ん中の子と一年前に産んだ末っ子は名前は分からない。
真ん中の子が女の子であることは聞こえてくる声で判断できるけど、一番下の子はまだ話せないだろうから正確な性別すら知らない。
俺はというと、もう自分で体を動かすことすらできなくなっていた。

原因は番欠乏とその状態で妊娠出産を繰り返したこと。
一人目を産んだ後、少しずつ体がおかしくなっていることに気づいた。時々来るお医者さんに伝えたが、何か治療がされることはなかった。
俺は子供を産む道具だから、その機能さえ無事ならそれでいいということなんだと思う。
体調のすぐれない中、嵌め格子の窓を通してお屋敷から赤ちゃんの泣き声が聞こえる。一目でもいいから子供を見たかった。
ヒートが再開したが、もう柊さんがこの蔵に来てくれることはない。
ヒートが来る度に柊さんを求める自分の体。彼を求めながら自分を自分で慰める。ヒート中はそのことしか考えられないが、終わると虚しくて虚しくておかしくなりそうだった。
ぐちゃぐちゃになったシーツを片付けてくれるメイドさんにも嫌な顔をされ、子供を産んで用のなくなった俺は、なんのためにヒートが来るのか分からなくなっていた。
そういえば、一人目の子を産んで四年ほど経った頃に柊さんがやってきたんだ。
来てくれたことが嬉しくて、ここに来た日のあの絶望も忘れて彼に期待した。俺のことを愛しに来てくれたのかなとか、子供に会わせてくれるのかなとか。
でも――
「静香が二人目を欲しがっている。次のヒート予定日はいつだ」
「え」
「早く答えろ。ここに長くいたくないんだ。ヒート予定日は？」



「……先週終わったばかりなので、三ヶ月後です」
「はぁ、タイミングが悪いな。じゃあ次のヒートでまた子供を作るから産め」
「あっ、柊さんっ!!」
――バタンッ。
彼は俺の存在なんてないかのように出ていってしまった。
俺はまた子供を産むの？　会えないのに？　産むの？
今は誰もいない平らな自分のお腹に手を当てる。ここにまた命を宿して、十ヶ月もの間、自分の中で育てて、そして触れることも顔を見ることもできずにまた一人になる。
俺の人生は、なんなんだろう。
二人目を妊娠して、出産して、また妊娠して、出産して。その度に俺の体はどんどん弱くなっている。
三人目を産んだ一年後の今、俺はメイドさんの世話なしには生活ができなくなっていた。
食事を摂ることもトイレも一人ではできなくて、嫌な顔をしながら俺の世話をするメイドさんに頼りっきりだ。
「はぁ、なんで私が大人の男のオムツ替えなきゃいけないのよっ」
「ごめんなさい」
「早く食べてよっ！　こんなとこ長くいたくないんだから」
食事といってもカチカチのお米に少しの魚にお味噌汁。それを全部混ぜたものを口に入れられる。

多分俺はもう三十歳のはず。そんな歳の男がメイドに世話されなければ生きられないことが恥ずかしくて虚しくて、悔しかった。
もう自分の命が長くないことは分かっていたから、すぐにでも死にたかった。
この場所でなら時折、子供の声が聞こえる。顔も見たことない自分の子の存在を少しでも感じながら死にたい。
最後に園長先生に会いたいなって、最近はそう思う。最後まで俺のことを心配してくれていたから。
園長先生は手紙を書いてねと言っていたのに一度も書けなかった。
もう俺のことを忘れているかもしれないけれど、あの施設にいた頃に戻りたい。裕福だったわけではないし、周りと比べて親がいないことを辛く思ったし、一人で眠るのは寂しかったけど、だけど、俺の名前を呼んでくれる人がいて、心配してくれる人がいて、おはようやおやすみって挨拶をする相手がたくさんいた。あの場所に戻りたい。
大金はかかるが、病院で番を解消してもらえるのは知っていた。借金をしてでもそうすることはできた。
俺がまだ体の動くうちに逃げ出していたら、こうはならなかったのかもしれない。
「はやく、死にたいよ」
——ガラガラ。
今日はもうメイドさんが来たのに、誰？

も、もしかして、柊さん？
馬鹿な俺はこんな状態になっても愛してもくれない番を求めている。
「本当に、いた」
……誰？

二、

【理玖】

「理玖、お前フラフラしすぎて本家から嫌われてるんだって？」

「あぁ、あの家おかしいから嫌いなんだよ」

「でもお前が反抗して立ち上げた会社めちゃくちゃ儲かってんだろ？　柊家からしたらお前のこと手放したくないだろうな」

友人とそんな会話をしながらも、俺はこの後のことを考え憂鬱になった。

俺は柊理玖。

柊本家の次男でαの俺は、幼少期からずっと柊家の教育を受けて育った。

人の上に立つための人格、知識、そして後継を作るためだけの許嫁。大学在学中にそんなことが全部馬鹿らしくなった俺は、婚約を破棄して、卒業後に入社する予定の柊家が経営する会社にも就職せずに自分で会社を設立した。

それから約八年。もう三十歳になるが特定の相手もなくフラフラしている。そのせいでよく柊の本家に呼び出され説教をくらう。

二年前までは女を取っ替え引っ替えして遊びまくっていたが、しつこい女に刺されかけてからは遊ぶのをやめた。それを良いことに次々に見合い話を持ってくる本家の奴らには嫌気がさしている。

当主である父は俺に本家を継いでほしいそうだが、そんな気はない。俺には兄がいるし、兄には奥さんも子供もいる。兄さんが継ぐのが一番良いだろうに。

今日も本家に行くが、甥っ子姪っ子に会えるのだけが嬉しい。

兄さんの奥さんは長年、不妊治療をしていたので子供が生まれた時には本家も分家も総出でお祝いムードだった。後継となる男の子だったから余計に。

兄さんの長男の優はおそらくαだ。兄さんも奥さんもαだからαの確率は高いだろうしな。

優はえらく大人びていて正直子供らしくない。それに時折、暗い顔をしているのが気になって、俺はよく会いに行くようになった。

長女の日和と次男の陽介は幼いが、顔が整っていて可愛らしい。会うと抱っこをせがんでくれるのも可愛い。

陽介は最近ようやく歩けるようになっていてトタトタと歩く様子が微笑ましい。

ただ、父に結婚はまだかとか会社を継げとか小言をたくさん言われるのが憂鬱だ。

足が進むような進まないようなそんな感覚で本家に向かう。

本家の敷地は広大で、父が暮らす本邸と兄さん一家の別邸、それに使用人が住む家屋に会合をするための別棟と多くの建物が建っている。

敷地内の移動は車を使うし、セキュリティもかなり厳しく関係者以外が入るのは難しい。このデカい門も内側が全く見えない高い塀も、何もかもに嫌悪感を抱く。

「俺だ」
そう言うと門が開き、父さんの付き人である清水さんが車の扉を開けてくれた。
「理玖坊ちゃん、そんな嫌な顔をなさらないでください」
「嫌な顔するに決まってるだろ。毎度毎度同じことばかり言われるんだから。俺は甥っ子と姪っ子に会いに来たんだよ。父さんに小言を言われに来たんじゃねえよ」
「旦那様は理玖坊ちゃんに期待されてるんですよ。結弦様を後継と断言されないのもそのためかと」
「兄さんでいいじゃん。俺なんかよりさ」
「結弦様も優秀な方ではありますが、理玖坊ちゃんには及びません。それに――」
「それに？」
「いえ、なんでもございません。さ、旦那様がお待ちです」
清水さんに連れられ父さんの部屋へ行くと、過去に戻ったのかと思えるほど前回と全く同じ話をされた。適当に相槌を打ってやり過ごしたが、最後に気になることを言われる。
「理玖、お前は結弦のようになるな」
どういうことだ？　兄さんのようになるな？　兄さんに何かあるのか？
そんな疑問を抱きながら、清水さんの運転で別邸に向かう。
インターホンを押すと義姉さんが出てくれ、その後ろから日和が駆け寄ってきた。
あぁ、俺の癒し。



「りくおじさん!!」
「日和〜！　久しぶりだな！」
「理玖さん、お久しぶりね。どうぞ」
「すみません、お邪魔します。今日は兄さんはいないんですか？」
「えぇ、明後日まで出張なのよ。私も今から出かけなくちゃいけなくてね、子供たちを使用人にお願いしてるの。でもゆっくりしていって？」
「留守中にいいんですか？」
「えぇ、理玖さんですもの」
義姉さんは感情があんまり読めないんだよな。
兄さんにとっては俺は邪魔な存在。俺は兄さんのこと尊敬してるし好きなんだけど、家を継ぎたい兄さんからしたら俺は邪魔すぎる。その奥さんであるこの人にとっても、俺は邪魔なはず。
「ひよりね！　おえかきしてたの！　おじさんもしよ！」
「日和、あまり理玖さんを困らせないのよ？　お母さん出かけるからね？　良い子にしててね？　じゃあ理玖さん、よろしくね。陽介は寝てるから当分起きないと思うわ。優は部屋で勉強してるから」
そう言って奥さんは出かけていった。
「おじさん!!　はやく!!　だっこ!!」
「はいはい、ほらっ」

「きゃー!!」
日和は本当に甘えただな。陽介は眠っているらしく今日は会えないかも……と思いながら、日和を抱っこしてリビングへ向かう。
ピンクや赤の明るい色を使って可愛らしい絵を描いていた日和は遊び疲れたのか、しばらくするとぐっすり眠ってしまった。そんな日和を彼女の部屋に運んだ俺は、隣の優の部屋を訪ねる。
「優〜？　入るぞ？」
部屋に入ると、机に向かっていた優がこちらを振り返った。
「理玖おじさん、久しぶり」
「あぁ、久しぶりだな。勉強してるのか？　偉いな」
「そんなことないよ。普通だよ」
「そっか」
「……」
「優？　どうした？　なんか元気ないぞ？」
「……今、母さんいないよね？」
「あ、あぁ、さっき出かけたぞ？」
「理玖おじさん、相談があるんだけど、聞いてくれる？　その、母さんにも父さんにも言わないでほしい」
いつになく真剣な甥っ子の表情に少し背筋が伸びる。



「相談って何？」
「……その、相談ってのは僕の、いや、僕たち三人の本当の母親のことなんだ」
「は？」
本当の母親？　なんのことだ？　なんの、冗談だ？　え？　本当の母親？
「……おじさんは何か知らない？」
優のこの真剣な表情や性格からして冗談ではない。この子は真剣に自分の親のことで悩んでいる。
「優、俺は何も知らない。今、優から聞くまで、お前たちは兄さんたちの子供だと思っていた」
「多分、父さんは僕の父親に間違いないんだと思う」
「なんで母親が違うって思ったんだ？」
「……信じてもらえないかもしれないんだけど、僕、生まれた時の記憶がある」
「え？　生まれた時のって、ゼロ歳ってことだよな？」
「うん」
本で読んだことがある。世界でも何件も幼児期健忘のない人がいる、と確認されている。優がそれだということか。
「僕が生まれたの、この別邸の近くの蔵の中なんだ。……僕に向かって手を伸ばしていたのを覚えてる。男の人だった。泣いてたんだ。でも、すぐに僕は蔵から出されて父さんと母さんの腕に抱っこされたんだ」
「蔵、あそこは何年も使ってないはずじゃ？」

「ううん、あそこに人がいるのは確かだよ。メイドが毎日行っているから。僕、あの男の人のことが気になって仕方ないんだ。お腹の中にいた時、怖いって声が何度も何度も聞こえたんだ。なのに、たくさん話しかけてくれた」
「男ってことは、Ωか」
「それに先月、父さんと母さんが喧嘩してるのを聞いたんだ。母さんが父さんに、僕の髪と目の色が嫌だって言ってた。あのΩの色だってそう言ってた。母さんが泣き崩れながら、『なんで私は子供が産めない体なの、あの子たちはなんで私が産んだ子じゃないの』って。その後、父さんは母さんに『あのΩはただの道具だ。子供たちは俺たちの子供だろ？』ってそう言ってた」
「なんてことを……」
「生まれた時しか見なかったけど、母さんに顔が少し似てた。だから、親戚たちも僕を父さんと母さんの子だと信じて疑わない。ねぇ、理玖おじさんっ、僕っ、どうしたらいいの？」
涙をポロポロ零しながら俺に訴えてくる優をギュッと抱きしめる。
この子はいつからこの事実を抱え込んでいたんだ。母親が本当の母じゃないこと、自分の本当の母が別にいること。
「理玖、俺が調べる。だから、少しの間待っててくれないか？」
「……うん、僕、あの人に会ってみたいんだ。あの人が伸ばしていたあの手に触れたいんだ。お腹の中にいた時にあんなにたくさん話してくれたのに、僕はあの人に何も言えたことはないから」
「うん、少しの間待っててくれ」



泣きじゃくる優を慰めながらも、俺はまだ信じきれていなかった。
俺は兄さんを尊敬しているし、兄さんがこの柊家を継ぐのに相応しいとそう思っている。
でも、これが事実なら兄さんは許されない罪を犯している。
「優、その男の人は蔵にいるんだな？」
「うん、そうだよ。この部屋から少し見えるんだ。でも、一度も蔵を出たのを見たことがない。メイドが蔵に行くのは一日に一回だけだと思う。さっき出てきたから、今日はもう誰もあそこには行かないはず」
「分かった。俺が様子を見てくるよ。優、もう少しの間このこと黙っていられるか？　俺と優との秘密だ。じゃないと、その人が危険に晒されるかもしれないからね」
「うん、分かった」
俺は優の頭を撫でて部屋を出た。自然と早足になる。
小さい頃にかくれんぼに使った記憶がある蔵。
小さい嵌め格子の窓があるだけの暗い蔵に何年も閉じ込められるなんて。
それに、メイドが一日に一回しか訪れないということは、食事もまともに摂れていないのかもしれない。あの蔵には電気もエアコンもついていない、人が住むような場所ではないはずだ。
兄さんが本家に言わずにこんなことをしているなら、あの蔵を改装なんてしていないだろう。
そう言えば、今日父さんが言っていた兄さんのようになるなという言葉は、もしかしたらこのことなのかもしれない。

そうなると、本家は知っていながらも知らないふりをしているということか。余計に反吐が出る。
蔵に着いた。周囲を確かめてみると、足跡がいくつもあり人が出入りしているのが分かる。
恐る恐る扉を開け、中に入る。格子窓のすぐ下にシングルベッドが置いてあり、そのベッドに男の人が横になっていた。
「本当に、いた」
本当に、Ωの男性がここにいた。
医療知識のない俺でも分かる。かなり弱っている。
痩せ頬はこけていて、呼吸が荒い。
俺を不思議そうな目で見る彼の近くにしゃがみ込み、顔を覗いてみる。
彼はΩらしい可愛い顔をしていた。歳は、二十六とかか？
「はじめまして、俺は理玖って言います。君の名前は？」
「えっと、俺の名前」
少し難しい顔をして何かを思い出すような表情だ。
自分の名前が分からないのか？
「ぁ、か、楓」
「楓君だね。よろしくね」
「はい」
楓君か、彼に似合う名前だ。



俺は初めて会ったこの時から彼に夢中になっていたんだと思う。

□ ■ □

知らない人が俺の近くにしゃがみ込んだ。
ピアスをしていてなんだかちょっとチャラい感じがする人。その人は優しそうに微笑んで、「はじめまして、俺は理玖って言います。君の名前は？」と言った。
「えっと、俺の名前」
名前、俺の名前って、なんだっけ。
あ、そうだ、楓だ。
「ぁ、か、楓」
「楓君だね。よろしくね」
名前を呼ばれたのはかなり久しぶりで、自分の名前すら思い出せなかったことに驚いた。ここに来て初めて自分の名前が呼ばれた。
「はい」
よろしくってどういうことだろう。もしかして、次はこの人の子供を産むのかな。
でも、柊さんと番になっている俺は別の人には拒絶反応が出る。それに、もう産みたくない。
「あの」

「ん？　何？」
「俺、もう産みたくないです」
「え？」
「ぁ、ごめんなさい、ごめんなさい、産む、産むから、ごめんなさいっ」
「楓君？　俺は君に子供を産ませるためにここに来たわけじゃないよ？」
え、違うの？　なら、なんで？
分からないことだらけだった。俺とちゃんと会話してくれる人なんてここに来てから初めてだ。
この人は、何？
「楓君、単刀直入に聞くよ？　君は、柊結弦の子供を無理やり産まされたのか？」
「っ」
「それは、肯定と受け取っていいね？　それに、匂いがしないってことは君は兄さんに番契約をされているね？　そして今、番欠乏の症状で起き上がることができない。違う？」
本当のことを否定はできない。ただ、この人が何者なのかが分からなくて、どうしたらいいのかも分からない。
「あの、あなたは？」
「ん？　さっき言った通り理玖だ」
「ぇっと、何者なのかが、分からなくて」
ここで会ったことがあるのは、柊さんとその奥さんといつも来るお医者さん、あとはいつも来てくれるメイドさん。俺はその四人しか知らない。
「怖がらないで聞いてね？　俺は柊理玖。柊結弦の弟だ」
それを聞いて体が震えてしまった。怖い。単純にそう思った。
「大丈夫、俺は兄から君を救いたくてここに来たんだ。兄がしていることは大罪だ。君をここに監禁してこんな状態にしている。このままでは君は死んでしまう」
「……いいんです」
「え？」
「死んでいい」
「な、なんで？」
「なんで？　じゃあ、なんで死んじゃダメなんですか？」
死んじゃダメな理由が俺には分からなかった。
こんな状態では子供だって産めないだろうし、もう邪魔なだけだろうし。
「君は生きていたくないの？」
生きていたく、ない。
だって、俺は生きていたって道具にされるだけ。
最近では少しの食事も吐いてしまう時があるし、トイレだって一人では行けない。起き上がることもできない。こんな状態で生き続けたいと思うのか？
自分の産んだ子供にも会えず、番にも会えず、愛されもせず、体が弱っていくのを感じる毎日。

そんな日々で生きる希望なんて生まれるわけがない。
俺は馬鹿だから何度も何度も期待した。子供を産めば愛してくれるかも、もう一人産めば次こそはって――
でも、願いは一度も叶わなかった。
「もうやり残したことは、ない？」
「……」
やり残したこと。
「……会いたい人もいない？」
「……俺が、俺が産んだ子供に、会ってみたいっ、でも」
「でも？」
「会いたくない」
「どうして？」
「辛かったことを、思い出すからっ、俺はきっと、俺が産んだ子供に恐怖を感じてしまうっ。ここから声が時々聞こえるから、それで十分です」
本音だった。
窓から子供の声を遠くに聞きながら過ごす日々の中で、会いたいという願いをずっと諦められなかった。
持ったことのない家族という存在、自分と血の繋がった存在、俺のお腹を蹴っていた子供たち。



でも、会いたくないのも本音だ。
怖いから。自分のお腹の中で育てた大切な存在なのも事実だが、柊さんとの子供。あの冷たい瞳や俺を道具のように使う彼の行動を嫌でも思い出す。それが怖くて仕方ない。
だから、会いたくなかった。お腹の中にいたあの十ヶ月の思い出だけで十分だと思った。
会話ができたわけでも顔を見られたわけでもないけれど、俺の体は覚えてる。確かにあの子たちは俺の中にいたんだ、俺のお腹の中で生きていたんだ。
「……俺、また会いに来てもいい？」
「え？」
「君に会いに来てもいい？」
「……」
「いや、勝手に会いに来ることにするよ。好きな食べ物とかある？　お土産に持ってくるよ」
「……好きな食べ物？」
「じゃあ嫌いなのは？」
「……特に、ないです」
「そっか。じゃあ消化が良さそうなもの持ってくるね」
俺の頭を撫でてその人は扉から去っていった。結局、何しに来たのかよく分からなかった。
また来るって言っていたけど、本当なのかな？
とりあえず疲れた。今日はもう眠ろう。

今の俺は眠ってばかりだ。少しのことで体が疲労を感じる。眠くて仕方ない。
ただ、久しぶりに人と会話して、少し、ほんの少しだけ嬉しかった。

あれから三日が経つ。
俺は風邪をひき、蔵で一人苦しんでいた。
病気だからといってお医者さんを呼んでもらえるわけではない。三人目の出産までは毎月お医者さんが来てくれていたが、三人目を産んでからはほとんど訪れなくなった。
柊さんと奥さんは子供は三人までいいと言っていたらしいから、もう用なしになった俺はさっさと死んでくれってことなんだと思う。
「はぁ、まだ熱、下がらないんですか。さっさと治してもらえません？　私にうつったら困るんですけど」
「ごほっ、っ、すいませっ、ごほっっ」
「どうせ眠ってるだけでしょ？　ならオムツ替えなくていいですよね？　食事もめんどくさいんでここ置いときますから自分でやってください」
「えっ、あのっ」
「あなた、旦那様の愛人なのかなんなのか知りませんけどね！　旦那様と奥様とお子様たちで幸せな家族を邪魔して楽しいんですか？　ほんと、Ωって卑しい生き物ねっ！」
そう言ってメイドさんは出ていってしまった。



そっか、俺はこの家を邪魔している存在なのか。
そうだよな、ほとんどの人はあの子供たちを俺が産んだなんて知らない。
Ωになんて生まれたくて生まれたわけじゃない。俺は平凡に生きられればそれで良かったのに。
あぁダメだ。熱が出ているのもあって、いつも以上にネガティブな考えで頭がいっぱいになってしまう。
――ガラガラッ。
「楓君、入るぞー？」
あ、この声、えっと確か……
「理玖さん」
「楓君っ！　どうしたの？　風邪かい？　……ひどい熱じゃないかっ！　ちょっと待っててくれ！」
理玖さんが蔵に入ってきたと思った直後、扉から出ていってしまった。
こうして一人で苦しい思いをしていると、そんなのありえないって分かっているのに柊さんがあの扉から入ってきてくれるんじゃないかって期待してしまう。たった三度しか抱かれたことはないけれど、その時に嗅いだあの匂いをもう一度嗅ぎたくて仕方ない。
「柊さん……」
来るはずのない彼の名を口にして外に向かって手を伸ばす。
自分の命の終わりが近いことを日々感じていて、さらに今回のように熱が出ると、どうしても最後に柊さんに手を握ってほしいとそう願わずにはいられない。

手を伸ばしたままだんだんと瞼が落ちる。閉じ切ったと同時に涙がポロリと零れた。
眠っている間に夢を見た。
あんなに伸ばしたのに握られることのなかった手を誰かが握ってくれる夢。
柊さんや生まれた子に向かって伸ばしていた手を誰かに握ってもらった夢だ。
ここに来て初めて明るい夢を見た。いつも見るのは初日に柊さんに事実を告げられた時や子供を出産した日の夢ばかりだったから。
起きた時に泣いているなんて日常だ。
だからなんだかふわふわとしたような感覚で目覚めたのは初めてで、おでこに冷たいタオルが置かれてるのにすぐには気づかなかった。
「起きたかい？　とりあえず解熱剤が効いてるみたいだけど、体が弱ってる状態だから油断はできない。……お粥あっためたけど食べられそう？」
「お、粥？」
「ここに置いてあった食事は病人が食べるようなものじゃない。もしかして君はいつもあんな食事しか貰えないの？」
「……ぇっと」
何も言えなかった。だって事実だから。
俺だって普通じゃないって分かっている。悪意で粗末な食事が用意されていることなんて、分かっているんだ。



「もう少し、もう少しだけ待っててくれ。俺が絶対に救い出すから。すぐだから」
そんなに必死にならなくていいのに。俺はどうせ長くないんだから。
それよりも、さっきの夢をもう一度見たい。誰かに手を握ってもらっていたあの夢を。
もう一度目を閉じたら見られるかなと思い目を閉じてみるが、起きたばかりで眠れるわけもなく再び目を開けた。
「食べやすそうなもの色々買ってきた。ごめん、俺、料理できねえから、全部出来合いのものだけど……」
理玖さんが袋から出してくれたのは、お粥や茶碗蒸しのご飯系からヨーグルトにゼリーなど甘いものまであった。
あ、みかんのゼリーだ。
甘いものなんて施設で食べたのを最後に口にしていなかったし、みかんは妊娠中に食べたかったけれどできなかったものだ。思わず見入ってしまう。
「ゼリー？　これ食べる？」
「……欲しいです」
「うん、……はい、あーん」
口を開けると、冷たいゼリーが口の中に入ってきた。
優しい甘さが口の中に広がってずっとずっと食べたかったみかんを食べられたことが嬉しいのか、食べたかったのに食べられなかったことが悲しいのか、そもそもあの妊娠生活を思い出したのか、

ポロポロと涙が流れて理玖さんを困らせてしまった。
普段から食事量が少ないので半分も食べられなかったが、この食事だけで当分は元気でいられるんじゃないかと思う。
「もう少し食べられるといいんだけど、これはどう？」
俺がゼリーをもういらないと言った直後なのに、理玖さんは茶碗蒸しを口元に持ってきた。
お腹いっぱいだと思ったはずなのに湯気が立っているそれが視界に入ると、自然と口を開いていた。さっきとは違う温かくて優しい味が美味しくて、呑み込んですぐにまた口を開く。
温かい食事も、久しぶりだな。妊娠中だけは普段よりは良いものを貰えたけれど、それでも出来立ての温かいものを食べられる日はなかった。
今日は涙腺が緩いみたいだ。ご飯が温かいってだけでこんなに涙が出るなんて。
「こんなことで感動なんてしないで。それが当たり前だって思えるようにするから」
そんな言葉が聞こえたが、俺はそれに答えられなかった。

【理玖】

俺は知人の探偵事務所を訪れていた。
優を疑っていたわけではない。でも、尊敬していた兄さんがあんなことを、あんな酷いことをしているだなんて思いたくなかった。
歳の離れた兄さんは俺にとって憧れで、好きなことばかりしている俺と違い昔からこの家を継ぐために努力し続け柊のために動いている人だ。勝手な俺に嫌な顔一つせずに。
「俺が柊を継ぐからお前は好きに生きたら良い。やりたいことしろ」
そう言ってくれる人だった。兄さんがいるから俺は好きに生きられていたし、俺が作った会社が潰れなかったのも軌道に乗るまで兄さんが柊から守ってくれたからだ。
〝良い兄〟
そんな言葉がぴったりの人だった。歳が離れているというのもあるが、兄弟喧嘩なんてしたことなかったし、兄さんが怒っているところすら見たことがなかった。
だが、俺は兄さんの薄っぺらい表面しか見ていなかったんだと思い知らされる。
ずっと使っていなかったはずの蔵の中は信じられない光景だった。
痩せ細ったΩの青年。弱っているのが一目で分かるほど顔色の悪い青年と手入れされていない埃っぽい部屋、不快に感じる異臭。
悪い意味で別世界がそこには広がっていた。
けれど、こんなに弱っていても優と同じ黒いその瞳は綺麗で、吸い込まれそうだと思った。
名前を聞いても、彼がすぐに思い出せないのには驚いた。
俺が「楓君」と呼ぶと少し嬉しそうだった。そのちょっとした変化で彼がなぜ自分の名前を思い出せなかったのか分かってしまった。

この家で彼の名を呼ぶ者がいなかったに違いない。自分の名前を忘れてしまうほどに。
俺はこれから柊家にとって敵になるだろう。
本家の敷地内で起こっていることだ。たとえ本家が兄を切り捨てても影響があることは自明だ。
少し気がかりなのは、楓君が産んだ三人の子供たち。このことが世間に知られれば、好奇の目からは逃れられないはずだ。
子供たちに罪はない。だから、慎重に迅速に事を進めなければならない。
「よう、久しぶりだな。お前が探偵頼るなんてどうしたんだ？　彼女の浮気調査とか？」
大学の先輩の吉良幹也。一流大卒業、司法試験一発合格、大手弁護士事務所に就職という輝かしい経歴があるにもかかわらず、急に探偵に転職した変わり者。
「彼女なんていませんって。幹也先輩、俺の兄のこと調べてくれません？　金はいくらかかってもいいですから」
「……へぇ？　なにそれ面白そうじゃん。俺が乗り気になったから格安で引き受けてやるよ。早く話せよ、なんかあったんだろ？　お前、尊敬してるとか言ってたじゃん兄貴のこと」
「実は、兄がΩを番にして子供産ませてたことが分かって。告発するために証拠を集めたいんです。できれば早急に。Ωの子、楓というんですけど、番欠乏でかなり弱っていて自分では動けないほどになってるんです」
「……一旦連れ出せねえの？」
「俺は医者じゃないので、彼を動かして良いのかが判断できません。それに、兄の家の蔵にいて家



の者の目を盗んで連れ出すのは難しそうで。昨日、俺の通っているバース医に協力をお願いしたところ、詳しい状況見て記録してきてくれれば薬を処方できるかもしれないと言われました。明日、兄も義姉も家を留守にするそうなので状況を詳しく見てこようかと」
「なるほどな。他になんか分かってることあるか？」
「すいません。俺のほうで調べたんですけど、何も分からなくて」
「おっけー。俺に任せろ、調べ尽くしてやる。……一週間だ。一週間で全部証拠集めてやる。もしそれ以上かかったらタダにしてやるよ」
「ありがとうございます先輩」
「……理玖、お前分かってるだろうが、一応聞くぞ？　柊を敵にしていいんだな？　下手すりゃ柊は終わるぞ？」
まだまだ差別的な目は残ってはいるが、今の世論はΩに味方する方向に寄っている。今回のことが公になれば、兄も柊も世間からバッシングを受けるだろう。
でも――
「いいんです。俺はこんなことをしてる奴らなんて潰れれば良いって思ってますから」
楓君は、楓君の目は助けを求めているように見えたから。
同じ柊の俺になんて助けられたくないだろうけど、柊の俺だからこそできる償いがある。今回のことが終わったら、一生かけて彼に償うつもりだ。兄さんの分まで。
「ま、俺が協力してやるんだから証拠は集まるぜ。あとはお前次第だ」

「ありがとうございます、助かります」
「理玖、躊躇したらそのΩの子を余計苦しめるだけだってこと、頭に置いとけよ？　お前はこういうことをするには優しすぎるからな。俺はそこが心配だ」
「……兄さんのこと尊敬してたし、今回のことはショックだったけど、昨日、一生分悩んだんで大丈夫です」
「なら頑張れよ。俺が協力してやって失敗なんてさせねえからな」

本当は毎日、蔵に通いたい。
番欠乏は想像以上に進行が早い。その事実を知ってから彼が心配でたまらない。
だが、ある程度の延命は薬さえ手に入れれば簡単にできるというのも事実だ。本人は苦しいばかりなのに。
毎日蔵に通って兄さんに知られることは避けたかった。証拠を隠され、彼を苦しめるための投薬をされたら彼の身を今よりも危険に晒してしまう。
……本当に？　彼のためなのか？　昨日先輩には躊躇しないと断言したけど、俺はまだ兄さんに……
楓君のあの状況をもう一度思い出せ。躊躇するな。
そう自分に言い聞かせながら本家の裏門を通った。
今日は兄さんも義姉さんも出かけていると優からメッセージが来ていた。



優は確信している。あの蔵の中にいるのが自分の本当の母親であり、それを自分の父と母が隠しているということを。さらに、俺に助けを求めたということは、楓君が酷い目にあっていることも予想しているのかもしれない。
本当に、賢い子だ。
できるだけ誰にも会わないように蔵に近づくと、女の人の声が聞こえてきた。
何か話しているのか？
音を立てないように聞き耳を立てる。
「……食事もめんどくさいんでここ置いときますから自分でやってください」
「えっ、あのっ」
「あなた、旦那様の愛人なのかなんなのか知りませんけどね！　旦那様と奥様とお子様たちで幸せな家族を邪魔して楽しいんですか？　ほんと、Ωって卑しい生き物ねっ！」
こんなふうに扱われていたのか。動けない体になって、誰かの手助けがないと生活ができなくなっているのに、こんな。
やっぱり、躊躇なんてするな。先輩が証拠を見つけ次第、すぐに彼をここから連れ出して入院させる。
とりあえず今は、楓君に少しでも生きる希望を持ってもらうために明るく、俺を頼りたくなるように。
「楓君、入るぞー？」

蔵に入ると、彼は風邪をひいたようで咳をして苦しそうにしていた。おでこを触ってみると熱がある。こんなにも弱っている状態でさらに風邪だなんて。

それに、ベッドの横に置いてある食事は酷いものだ。表面が乾いているご飯少量に、具のない味噌汁、明らかに焦げている唐揚げのようなものが二つ。言い方は悪いが残飯のような食事。触ってみるとどれも冷たい。先ほどメイドが来ていたから、冷めたとかではなく冷たいものがここに運ばれたんだろう。

俺は彼に少し待っててくれと伝え、急いで俺自身も診てもらっているバース医に連絡を取った。病院に来れば薬を処方すると言ったので、タクシーを拾い病院へ急ぐ。

「――先生、ありがとう」

「いいですよ。この間相談された人ですよね？」

「ええ。風邪みたいで」

「強い薬は実際に患者を診ていないので出せませんが、解熱剤は処方しましょう。あと、おおよその身長と体重を教えてくれたので、このバース薬を飲ませてください。とりあえず番欠乏の進行を緩められます。……でも、あくまで進行を緩めるものです。できるだけ早く病院に連れてきてください」

楓君のおおよその身長と、体の細さから推測した体重を伝えたことで、バース薬を処方してもらえた。

「あぁ。ありがとう」



待たせていたタクシーに急いで乗り込み、本家に戻る。裏口から蔵へ入ろうとした時、中に楓君以外の人がいることに気がついた。

そこには、優がいた。

楓君の手をとって自分の頬をその手で包み込んでいる。優がこんなに甘えているのは初めて見た。

「……ママ」

ママと、そう言った。

義姉さんのことは母さんと呼んでいる。小さい時ですらママと呼んでいるのを聞いたことはない。呼んでみただけなのか？　優が？　俺の中の優はこんなふうに甘えるイメージなんてない、ママと呼ぶキャラじゃないというか……

そもそもなぜここに？　入ったことはないはずじゃ。いや、この蔵に何があるのか知っていて入ったことがないなんてことあるのか？　本当は時々入っていた？

「優？」

「あ、理玖おじさん」

優の隣にしゃがみ込みその顔を覗くと、少し気まずそうに目を逸らされた。

これは、ビンゴか？

「優はここに来るの初めてじゃないのか？」

「……うん。本当は何度も来てるしママが寝ている時にこの窓から覗いてた。父さんや母さんにバレないようにだから毎日ではなかったけど」

「ママって呼んでるのか？」
「僕がお腹にいた時に、ママは自分のことママって言ってたから。俺が君のママだよ。とか、ママは家族がいないから初めての家族になってくれる？　とか。……それに、僕はママの名前を知らないから。僕が知ってるママのことといえば、お腹にいた時に話してくれたことだけなんだ。ママはね？　授業参観に誰も来たことなくて寂しかったから僕の授業参観は行ってみたいって言ってたんだ。僕はそのママの願いを叶えたい。生まれる前からずっと僕はママのこと見てた。ママがどんどん弱ってるのも、命が危険なことも分かっちゃった。でも僕は子供で、何もできない。どうすればママを守れるのかも助けられるのかも分からない。ママは十ヶ月もお腹の中で僕を守ってくれたのに、僕はママを守れない。それが悔しい」
俺は優が涙をポロポロ流すのをこれまでほとんど見たことがなかった。優は子供らしくない子供で感情が見えない。
なのに、楓君のことに関してはこんなにも子供らしい。ママのことが大好きな子供だ。
「おじさんっ、お願いっ、僕なんでもする。今はお金とかないけどっ働くようになったら必ず払うっ。だからお願い、ママを助けてっ」
「優。大丈夫だよ、そんなお金なんていらないから。なあ優？　俺からもお願いがあるんだけどいい？」
「なに？」
「優のママを助けるために、優も俺に協力してほしいんだ」

「僕にできること、あるの？」
「あるよ。優、今回みたいにお父さんとお母さんが留守の日を教えてほしいんだ。それと、優のママがすごく苦しそうにしていたり何か酷いことをされていたら、すぐに教えてほしい。それにね、優のママはね、体の調子が悪いんだ。だから、助け出した後は病院に入院することになると思う。その時に近くにいて励ましてあげてほしいんだ」
彼は俺になんて心を開いてくれていない。
助け出すのがゴールじゃないんだ。助け出してから症状を改善するための治療が始まる。この家でずっと酷い扱いを受けていた彼の精神面もケアするために、俺ではできないことも、彼の息子である優ならできるかもしれない。
それに、優はママを思って泣き行動できる子だ。楓君の心の支えになってくれるかもしれない。
「僕、ママのためになんでもする」
「うん。でもね優、優のママは優に会ったことがないだろう。びっくりしちゃうから、ここから助け出せたら初めましてしよう。な？」
「うん。おじさん、ママが寝てる時なら時々ここに来てもいい？」
「あぁ。ただし、他の人に見つからないようにな」
腕でゴシゴシと涙を拭って優は蔵から出ていった。かなり名残惜しそうではあったけど。
「楓君、君の子供はすごく優しいね。優はずっと君のことを見守っていたんだよ、君は一人なんかじゃなかった」

解熱剤は飲ませた。電気毛布を買ってきて彼にかけているがまだ寒いんだろう、ガタガタと震えている。起きたら胃に何か入れてからバース薬を飲んでもらわなくちゃいけない。

「っ、う」

泣いてる？　いや、魘されているのか？

そう思ったが、楓君の表情は少し柔らかくなった。と同時にその目が開いた。

良かった。このまま目が覚めなかったらどうしようかと不安だったが、意識がしっかりある。おでこに置いたタオルが少しぬるくなってきたので替えてやると、気持ち良さそうな顔をしてくれた。

買ってきたものを見せてどれか食べられそうか聞くと、楓君の目線がみかんゼリーに向いているのに気がついた。

これが食べたいのか？

ゼリーをスプーンに載せ運んでやると、素直に口を開く。一口、二口と食べ進め、楓君は涙を流した。

最初は俺に食べさせられるのが怖いのかと思った。番のいるΩである彼は俺に拒絶反応が出る。可能な限りの接触は避けているものの、俺がいることで何か気に障ったのかと思ったのだ。

だが、彼は食事に感動していた。涙を流しながら次の一口を求めて口を開ける姿は、俺にとって衝撃だった。

たった百円のゼリーだぞ？　小学生だってお小遣いで買える。

だが楓君は体が動かないから自分で買うことなんてできない。なのに、この場で彼のために百円



のゼリーを買ってくれる人はいないんだ。

それに大きくはないゼリーを半分ほどでもう食べられないと首を横に振るなんてことあるのか？優はもちろん日和だって食べ切れるサイズだ。

布団から出ている腕を見るにガリガリに痩せていて、これは一刻も早く病院で精密検査をしないと内臓がどれほど弱っているのか。

この少量のゼリーだけでは薬を飲ませるのが怖かったので、コンビニで温めた茶碗蒸しも口に運んでやる。幸い、口を開いてくれた。これもまた涙を流しながら食べてくれる。

温かいものに甘いもの……ここにある用意された食事を見るに、そんなものはなかなか食べられなかったんだろう。

ここは柊の本家で、金がないなんてありえない。楓君がこの家に何をした？　優たちを産んでくれた恩人なんじゃないのか？　義姉は子供が産めないんだろう？　出産は命懸けだ、楓君は年々弱っていたのに三人も産んでくれた。彼が今日まで無事だったのは奇跡だと言っていい。それなのにこの仕打ちって……

悪魔に魂でも売ったのか？　そう思えるほど人とは思えない所業だ。本来であれば何一つ不自由のない環境を用意し、頭を下げてお願いする事案だ。それでも許されることではないが……

楓君がどこから連れてこられたのかはっきり分かっていない今の状況では、どうしてこうなったのか分からないが、兄たちが大きな間違いを起こしているのは明白だ。

なのに、楓君は兄さんのことを悪く言わない。

立ち読みサンプルはここまで

だからこそ、早く救い出さなければいけないんだ。兄さんの弟として、優のおじさんとして、俺は楓君のためにできることはなんでもやりたい。

多分ここに入ったあの日あの瞬間から、俺は楓君に心底夢中になってしまった。

兄さんを思う気持ちを俺に向けてくれたら、なんてそんな気持ちが芽生えていることに気づかないふりをしていたけれど、やはり想いというのは止めることができない。

それでも、俺はこの気持ちを今、楓君にぶつけることなんてしたくない。してはいけない。

そんなの、強欲なαそのものだ。兄さんのしてきたことと相違ない。

俺はαだ。大切なΩを守るための存在だ。

楓君、もう少し待っててくれ。俺に君の手を掴ませてくれ。

【幹也】

柊家の息子なんて大物が後輩にいる。

だが、そいつは家に反抗して会社を作って大成功するようなはみ出し者。敷かれたレールに沿って歩いたって成功間違いなしの人生なのに、わざわざ違うレールを自分で敷いて成功を収めた男。

そんな奴が俺に頭下げて頼んだのは、柊木家で起きている事実の証拠集め。

俺は優秀な探偵だが、柊家相手となると油断できねえ。それでも可愛い後輩がこうして頼むんだから、受けねえわけにはいかねえだろ。

それにしても、あいつの兄貴がΩを監禁して子供産ませてるなんて、この時代にそんなことが起きているとは信じられねえってのが普通だ。

だが実際、金持ちがΩを囲っているって話は裏の世界ではよく聞く。

Ωはまだまだ社会的地位が低い。だからこそ、そんな犯罪に巻き込まれてしまう。仕事に就けないからと自ら身売りする奴もいるしな。

もちろん、今回はそうじゃない。騙して連れてきたという証拠を得た。

柊にいるΩは水城楓、生まれてすぐに児童養護施設ひまわり園の前に捨てられていて親は不明。園長の苗字である水城を名乗っていた。高校までの成績は可もなく不可もなく、平凡といった感じ。これまでに彼氏や彼女はなし、親しい友人もなし。六歳頃まで同じ施設にいた水城隼人という人物と仲が良かったが、彼が里親に引き取られてからは疎遠のようだ。

Ωであると分かってからは施設内に離れが建てられ、そこで生活。十八歳の時に柊から縁談の話が来た。当時、園長が周囲に楓が結婚することになったと嬉しそうに報告していて、楓にも料理を教えたり裁縫を教えたりと花嫁修業のようなことをしていたようだ。このことから園長は今起きている事実を知らない可能性が高い。

「闇深ぇ～、柊家やばすぎんだろ」

「吉良さん～これ、ゲットできましたよ～！」

「お！　よくやった！　一週間以内に集まらねえとタダ働きだからな～」